

「ペンテジレーア」について

著者	畠中 美菜子
雑誌名	東北ドイツ文学研究
巻	7
ページ	58-70
発行年	1963
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133468

『ペンテジレーア』について

畠 中 美 菜 子

1

ハインリッヒ・フォン・クライストの悲劇『ペンテジレーア』は 1806 年ケーニヒスベルクで書き始められ、翌年秋ドレスデンで書き終えられた。ケーニヒスベルクでは気のすまない官吏の仕事にたずさわりながら創作意欲には燃えて、ほかに『こわれがめ』『アンフィトリュオン』も平行して書いており、当時は作家クライストの最も実り多い時期であった。彼は 1807 年始めベルリンへの旅行の途上、スパイの嫌疑で捕えられ、フォール・ド・ジュール・マルスの捕虜収容所で荒涼とした生活を強いられている間も『ペンテジレーア』を書き続けていた。彼は 1807 年 12 月 17 日付 C. M. ヴィーラントにあてて、„Soviel ist gewiss: ich habe eine Tragödie (Sie wissen, wie ich mich damit gequält habe) von der Brust heruntergehustet; und fühle mich wieder ganz frei!“⁽¹⁾ またマリー・フォン・クライストあての手紙(同年秋)の中で „so von kassierten Varianten strotzendes Manuskript“⁽²⁾ と『ペンテジレーア』のことを書いているが、これらの言葉がよく表しているように、この作品は彼が全く心血を注いで書きあげたものである。

さてこのドラマに関しては早くから今日にいたるまで実に多くの人々が種々異った解釈を試みている。大まかなまとめ方をすれば、ペンテジレーアとアヒレスにみられる男女両性間の葛藤のドラマとみるもの、とくに精神病理学的分析によってペンテジレーアの恋愛心理を論ずるもの、クライスト自身の生活と体験——とくにこれが書かれた二、三年前の有名なギスカルト体験を、その苦悩するクライストの内面をペンテジレーアに具現して描いたとみるもの、最高の理想を求めてたたかう人間の姿を描いたとみるもの、感情の強烈さ、情熱の大きな力そのものがテーマであるとするもの、人間の中の絶対的二律背反の悲劇とみるもの、あるいはペンテジレーアという個人とアマツオーネの国家というその個人が生きる社会（とくにその掟）との間の葛藤をそのテーマとみるものの等々である。最後に挙げたペンテジレーア対国家の掟を中心に論ずる立場にはまたさまざまな解釈がある。両者を単なる *Neigung* と *Pflicht* の相剋とみたり、*menschlich*, *natürlich* なペンテジレーアの女としての感情と *unmenschlich*, *unnatürlich* な掟との葛藤とみたりする。

『ペンテジレーア』は女主人公の強く大きい自己感情（アヒレスに対する愛）が悲劇的結末をとるにいたる過程のドラマとみることができるが、この作品を考えるにあたっ

て次のいくつかの点に注意をはらうことが必要であると私には思われる。

1) ペンテジレーアが恋する相手のアヒレスはその内面的肉づけがほとんどなされていない人物である。だからこの恋は両者の相互の関係において描かれていず、主としてペンテジレーアの側からだけ問題にされていること。

2) アマツォーネ国の女王という彼女の生活規定は、ペンテジレーア個人に相対立する要素としてはじめから彼女の外にあるのではない。もちろんその外的規制（「生活圏」「生活形式」³⁾）はドラマの展開とともに問題になってくるが、ペンテジレーアと掟との葛藤がこの作品の中心テーマであるかどうかは別のことである。また掟（Gesetz）という言葉で表わされるものがそのまま国家（Staat）、社会（Gesellschaft）と同一概念ではない。アマツォーネ国の掟としてこの作品の中で直接問題になってくるものは二つあると考えられる。一つはアマツォーネたちはそれぞれ自分の好みに従って相手の男性を選びとることができるのにアレスの娘である女王は一つの名前を目ざして戦いに出るはならない（V. 1044f.）彼女は戦いで神が彼女に出現させる人を選ばなければならない（V. 2146）ということ、他の一つはアマツォーネは武力でもって相手をうち倒さなければならないということである。ペンテジレーアがアヒレスを追求めることは、アマツォーネ軍の戦いを不利にするので、ペンテジレーアがアマツォーネ国の女王であることと自分個人の背反に悩むのはいつもこの掟の故である。ところが武力で相手を得るという掟はアマツォーネ一般にとって逃れることのできない生活形式であり、ペンテジレーアに関して言えば、それがアヒレスの愛を得る唯一絶対の前提となっている。また直接問題になってほこないがその背後にはばら祭という特異な習慣がある。このように掟といっても種々の面からペンテジレーアと関係しあっているから、問題を一言で個人対掟と言いつくことはできない。

3) このドラマをいわゆる „Hassliebe“ からの凄愴な破局の結果にだけ力点を置いて論ずることは適当ではない。同時にペンテジレーアのアクティブな姿勢を強調しすぎることは一面的な把握に陥りやすいと思われる。それはたしかにこの作品の本質とかわっているが、作者クライストの有名な言葉が語っているように⁴⁾、ケートヒェンの „gänzliche Hingebung“ の „Kehrseite“ であるにすぎない。ついでに『ケートヒェン』と『ペンテジレーア』の大きなちがいは、前者が偶然的、奇跡的事象の積み上げから成るいわばメルヒェンの世界であるのに対して、後者は必然性に貫かれた現実世界のドラマであって、だからこそ、ケートヒェンとペンテジレーアは同種の人物であるのに、こちらは悲劇に終らなければならないと見ることができる。そこに『ペンテジレーア』がより切実な感動をひとに与える一因があるだろう。

さて私は、女主人公ペンテジレーアの著しい特徴、自己感情に没入して生きる姿をみることから始め、次にアマツォーネの国の一員という彼女の生活規制と彼女の願望との絶対的背反をドラマに即して見、20場以降を中心に破局の原因とその悲劇性について考えてみたい。

2

ペンテジレアのアヒレスへの愛はその出会いのはじめから強く彼女を支配する。彼は母オトレレの遺言によって予め相手として彼女に告げられていた。のちにペンテジレアが語るように „Mein ewiger Gedanke, wenn ich wachte, / Mein ewiger Traum warst du!“ (V. 2187f.) であって、他のクライストの人物たちにしばしばおこるように、夢の中で先取されており、今それが現実となったのである⁵⁾。このペンテジレアの感情の強さはドラマの発展とともに高まるというのではなく、はじめからピンと張られた弦のようにドラマの中心をとっており、他の要素と関係しあつて種々の音色に鳴り終局にいたるのである。第5場ですでに「一万の太陽を溶かして一つの灼熱の球にしても、私の彼に対する勝利ほど輝かしいとは思えない。」(V. 631ff.)とその強さが語られる。このペンテジレアの自己感情の強さは絶対的なもので、悲劇的狀況が展開するにつれ苦痛と絶望がたかまっていくながらこのドラマの内容となる。(その中央に14, 15 場のような歓喜の場面があるが、それは実にもろく崩れ去る。)

ペンテジレアが自分のこころのうちの感情に熱中しているとき、他の人々の中にあっても周囲の人々は彼女の意識から全く消えてしまう。アヒレスとの最初の出会いのときオデュッセイオスから同盟の申し入れを受けたペンテジレアは、それに答えることも忘れて酔ったようなまなざしでアヒレスを見ている。第5場で「私は彼をうち倒そうと思う。この光輝ある戦いの日に、まだ誰もしたことがないように、私の高揚せる戦闘気分をかき乱すあの不遜な男を。」(V. 638ff.) 「……この唯一人の勇士を見て、自分が麻痺したように、心の奥底をうたれたように感じないだろうか？ 私、この私を制服された女、うち負かされた女と感じないだろうか？」(V. 646ff.)とアマツォーネにふさわしくない明らかな恋愛感情を表白するのは大勢の將軍たちのただ中であって、プロートエに気が昂ぶっているから少しお休みなさいと言葉をかけられると「どうして？ 何のために？ どうしたというの？ 私は何を言ったのだろう？ 言ってしまったのかしら？ ………一体何を言ってしまったのだろう？——」と狼狽する。さらに第9場で一旦自分の感情を抑え、臣下たちの勧めに従って撤退しようとするとき、ペンテジレアは突然立ち止り、「退く前にまだ一つ残っていることがある」と言う。「もし可能性の全領域において自分を試みてみないなら私は気が狂ってしまうだろう。」(V. 1367ff.) それなら救いの道はもうないとプロートエが憤ると、ペンテジレアは「何でしょう？ どうしたの？ 私は一体彼女に何をしたのかしら？」と驚く。他の人々と一緒にいても、自分自身のおもいに没頭し、なかば無意識の状態にあり、外の世界から断絶していることがしばしばである。このことは当然心理的なくいちがい、誤解を生む。たとえば同じ第9場で、「太陽はどの辺にあるだろう？」と突然聞くペンテジレアに対して、プロートエは時刻を聞いているのだと思い答える。「あそこ、あなたのちょうど真上です。夜にならないうちにあそこへ着くことができます。」しかしその間じゅうじつと太陽を見つ

めていたペンテジレーアは、「翼をうち広げてかなたへざわざわと大気を押し分けていくことができたなら!」「高すぎる。分っているのだ。高すぎる——彼は永遠に遠い炎の輪の中で、私のあこがれにみちた胸のまわりにただよっている。」と明らかに達しがたいアヒレスを太陽になぞらえているのである。次にこれはドラマの筋と関係する微妙な点であるが、第19場で、アヒレスからひき離されたペンテジレーアが味方軍の歓声の中でひとりその勝利を呪う。そして „War ich, nach jeder würdigen Rittersitte, /Nicht durch das Glück der Schlacht ihm zugefallen?……Gibts ein Gesetz, frag ich, in solchem Kriege, /Das den Gefangenen, der sich ergeben, /Aus seines Siegers Banden lösen kann?/ Neridensohn!“ (V. 2300ff.) と歎く。この言葉をもってただちに「彼女は Gefangene になってでも全き女として生きる——アヒレスへの愛をまつとうする気持になっていた」と解釈するのは疑問である。これはやはり愛する者からひき裂かれた絶望の叫び、どうにもならない状況への呪いであって、Gefangene になってアヒレスの故郷へついて行く心の用意ができる余裕などはないもっと直接的な歎きであろう。だから祭司長がそれを言葉どおりとって「神聖な戦いの掟」に従い、あなたを自由の身であると宣告するからアヒレスを追うがいいが、同時に女王として我々を故郷へ帰らせてくれと、ペンテジレーアの国家からの追放を宣言しながら女王としての責任をきびしく追求するとき、そこには重要な心理的なくいちがい、言葉の誤解がある。ペンテジレーア自身は、自分がアマツォーネ王国を去ることは絶対ありえない前提と感じていたので、アマツォーネ国を追放されることは自分の全存在をくつがえされるに等しい。だから自分の願望のどうにもならない桎梏となっていたこの生活規制が解かれてもそれを喜ぶどころか逆に奈落の底につき落されたような絶望に襲われ、 „Ich will in ewge Finsternis mich bergen!“ (V. 2351) と叫ぶのである。

以上ペンテジレーアが強い自己感情に耽溺して生きるという根本性格の故に、いかに外の世界との断絶あるいは錯誤を生んできたかを、主としてアマツォーネ軍の中、彼女の生活の中にみてきた。これと同じことが彼女の愛の対象であるアヒレスとの間にもおこり、それが破局にいたる一つの大きな原因となる。このことについてはのちに詳しくみることにする。

3

ではペンテジレーアとアマツォーネ国の掟の関係はどうであろうか。はじめに触れておいたように掟そのものとペンテジレーアを対立させて扱うことには問題がある。掟というよりは、ペンテジレーアがその中で生きている生活圏、生活形式、規制である。ペンテジレーアはその規制が自分の願望を妨げるとき呪い歎くことはあっても、その絶対的存在を一度も疑ったことはない。いわば自分の生の動かしがたい前提と感じているのである。従ってしばしば行われるように、このドラマを「アマツォーネから愛する女への発展の過程」とみたり「ペンテジレーアは第9場から」あるいは「第19場から完全

な女になる」としたり「第19場で完全な女性になっていたからまさに第20場でのアヒレスからの挑戦は Hassと Rache の感情をかきたてて彼女をアマツォーネにもどせられた」とすることは適当とは思われない。ペンテジレーアの中にあるアマツォーネと恋する女の二面を分けて考えるとすれば、それは、Kohrs も強調しているように、はじめから破局までつねに変わらず併存していたといえるであろう。しかしペンテジレーアにとって、アヒレスへの愛がいつもより大きな心の真実である。ではペンテジレーアの中で、この強い自己感情とアマツォーネとしての自己がどのように関係しあっているかを作品に即してみよう。

先にみた通り、ペンテジレーアは自分で自分の相手を選ぶことを掟で禁じられている。はじめペンテジレーアは彼女の（アヒレスを討ちたおすという形での）アヒレスへの愛着が国民の戦いを不利に導くことをプロートエにたしなめられて、「私はただ自分のことだけ考えているのだろうか？ 私を戦いの場に呼びもどすのはただ私の願いにすぎないのだろうか？」と半ば自問しつつ、いや、アヒレスを倒さなければ彼が、テミスユーラへ追いかけて来て捕虜を奪い返すだろうからという公的な理由をもってアヒレスと相まみえようとする。アマツォーネとして自分の望みを達するにはこの口実しかないからである。「ここのこの鉄が、仲間たちよ、この上なくやさしい抱擁で彼を私の胸に痛みなく引き倒さなければならないのだ（私は鉄で彼を抱かなければならないから！）」（V. 857ff.）このようにアマツォーネという現実の規制は、まだペンテジレーアの中に破綻なく併存しており、自分の真実の感情をその規制のもとに押し通そうとする。

しかしペンテジレーアがアヒレスとのはじめの一騎打ちで敗れたところから彼女の悲劇が予感され、苦痛と絶望がたかまってくる。アヒレスを武力で得るという希望がうち砕かれたことは、アマツォーネの女王にとって、アヒレスとの愛が不可能になることである。そこで自分の生活を規制しているアマツォーネという現実がはじめて心の欲求を妨げるものとして意識される。第9場でペンテジレーアのこころは一つの危機を迎える。これは大きな苦痛の場である。味方軍の戦利のためには撤退が緊急策であり、ペンテジレーアは一旦は故郷へ味方軍とひきあげる決心をするが、やはり „Staub lieber, als ein Weib sein, das nicht reizt.“（V. 1253）と彼女の心の願いはどんな悲劇的状况に陥っても変えることができない。それは限りなく大きな苦痛を代償とする。ここでの悲劇的状况とは、アヒレスの愛を得るには武力で彼を倒すことが前提なのに、自分はアヒレスに勝つことはできないという認識からくる救いがたい *Auswegslosigkeit*, 絶対的二律背反である。（「決するさいは投げられてある。私はそれを理解しなければならぬ……そして私が敗けたということ。」（V. 1306f.））臣下たちの逃亡のすすめを黙って聞いているペンテジレーアの両眼から涙があふれ出る。彼女は一本の木によりかかる。それをみたプロートエは突然心を動かされて彼女のそばに坐る。

Prothoe — Was fehlt dir? Warum weinst du?

Penthesilea

Schmerzen, Schmerzen—

Pr. Wo?

Pen. Hier.

Pr. Kann ich dir Lindrung—?

Pen. Nichts, nichts, nichts.

Pr. Nun, fasse dich; in kurzem ists vollbracht.

(V. 1291ff.)

死を決意した („Ich will in ewge Finsternis mich bergen!“ V. 2351) 第 19 場のペンテジレーアとそれに寄りそうプロートエのすがたにもこれと全く同じものがみられる。

Pr. ……Was bebst du, meine Königin?

Pen. Nichts, es ist nichts, ich werde gleich mich sammeln.

Pr. Ein grosser Schmerz traf dich. Begegn' ihm gross.

(V. 2343ff.)

自分の夢と苦痛とを全く理解して心からの優しさをさしのべているプロートエに対してさえ、ペンテジレーアは何でもない、何でもないと自分の Schmerz は自分ひとりの胸のうちに耐えようとする。どんなに親しい友人でも人間ひとりひとりの苦しみをどうしてやることもできないし、こころの悲劇を救ってやることができない。ここにはあの悲痛な英雄ギスカルトの孤独なすがたが重り合う。それは同時に当時のクライストの孤独感の反映でもあったろう。

「人間の力が行うことのできる最高のことをなした」(V. 1303f.) ペンテジレーアのこころは狂気すれすれの状態になっている。到底得ることのできないアヒレスを太陽にみて、高すぎる高すぎるといい、川に映っている太陽を見て川に飛び込もうとする。このように、クライストの人物は現実との破綻が頂点に達すると失神に陥る。

アヒレスに率いられたギリシア軍はアマツォーネを包囲し、ペンテジレーアは失神したまま、ついにアヒレスの捕虜となる。第 14、第 15 場の Täuschungsszene とその崩壊は、『チリの地震』の、地震後の悲惨な場面——森の中での平和な美しい安らぎの場面——暴徒による残虐な殺害の場面へと激変する „gebrechliche Welt“ に対応するが、あの短篇においては天災、思いがけないめぐりあいなど、主として外からの偶然の力による人間界の脆さ、はかなさが描かれているのに対し、このペンテジレーアのドラマでは、その脆さは人間の心に依存している。第 15 場はプロートエの思いやりに支えられている。ペンテジレーアの夢が実現したとき、それは現実の Täuschung とひきかえにであって、それに続く Enttäuschung とともに夢は残酷な現実と入れ代る。しかもこの残酷な現実を告げるのはアヒレスである。アヒレスはのちにもみるように、疑いなくペンテジレーアを愛してはいるが、彼女のおかれている Situation に対しては心がとどかず、他者であるにとどまる。ペンテジレーアの愛の ernst な内容を彼は感じとること

ができない。この第 15 場で、全ドラマの背景、ペンテジレアの生活様式を規定しているアマツォーネ女人国の建国の歴史とその掟が告げられる。クライストがこの素材を得たのは Benjamin Hederich の „Gründliches mythologisches Lexicon“ からであるとされているが⁷⁾、これによればペンテジレアがはじめアヒレスを倒すが、立ち直ったアヒレスが最後にはペンテジレアを殺すことになっている。クライストはアマツォーネ国についても大よその輪郭をこの Lexicon その他から得たにすぎず、ばら祭とかこのドラマに現出する破局などは一切彼の創作になるものといわれる。おそらくクライストはペンテジレアとアヒレスのくみ合わせ、その一方が他方を殺すという結末に惹かれたと同時に、戦いにおいて相手を獲得するというアマツォーネの掟の中に、強い感情を行動に表すという点で、自分の詩作の内容をもるにふさわしい素材を見出したのではなからうか。アマツォーネ国の掟の非人間性ということは、この作品の中でとくに強調されているとは思えない。もちろんそれは自然に反することであり非人間的ではあるが、この素材の意味をアマツォーネ国の建国の歴史にまで遡ってその点にみるのはいかがすぎではないかと思う。度々問題にされるような女性の恋愛心理のアクティブな面、あるいは女性の自我と愛の葛藤などは作者クライストの意図から遠かったであろう。作品以外に彼の残した諸資料の中にもそのような作者の思想を探しあてることができない。

ペンテジレア個人と掟自体の深刻な葛藤がこの作品にないことは前にみたとおりだが、第 15 場でアマツォーネ国の不思議な掟をペンテジレアから聞き知ったアヒレスが、„…… Und auch mich denkst du also zu entlassen?“ と問うと彼女は „Ich weiss nicht, Lieber. Frag mich nicht.“ と答える。掟と自分の愛の相容れないことについて切実に考えていればこういうあいまいな答はしないはずである。自分の望みが達せられたと思いこんで幸福感にひたっている彼女には、このことはあまり問題にならないのである。これはとりもなおさず作者の関心がこの点にないことを意味すると考えられる。

ペンテジレアの方が実はアヒレスの捕虜であるという現実が彼女に知らされたとき
Penthesilea *die Hände aufhebend*

Ihr ewigen Himmelsmächt! Euch ruf ich auf.

(V. 2259)

また *ausser sich*

Mir keinen Blitz, Zeus, sendest du herab!

(V. 2273)

と絶望の叫びをあげるだけである。17場での

O, Neridensohn!

Du willst mir nicht nach Themiscyra folgen?

Du willst nicht zu jenem Tempel folgen,

Der aus den fernen Eichenwipfeln ragt? (V. 2280ff.)

O! Nach Themiscyra!

O! Freund! Nach Themiscyra, sag ich dir,

Wo Dianas Tempel aus den Eichen ragt!

Und wenn der Sel'gen Sitz in Phthia wäre.

Doch, doch, o Freund! nach Themiscyra noch,

Wo Dianas Tempel aus den Wipfeln ragt! (V. 2285ff.)

このルフランには、もはや実現の可能性のほとんどない願いがなれば絶望的に、しかしまだわずかなのぞみを託して歌われる。故郷への憧憬のこの美しいイメージは、ペンテジレーアの、故郷との即ちアマツォーネの国家との深く断ちがたい結びつきを示している。彼女にとって自分の故郷を去ることは考えられないことなのである。ここで(第17場) „Komm her, ich sagte dir noch alles nicht——“(V. 2284) という意味のありそうな言葉は、おそらく上に引用した 15 場のアヒレスの問いに対する無責任な答を何らかの方法で補うつもりだったのではないかと推察することができる。ばら祭のすんだ後で捕虜を帰してやるという非人間的な、愛情を無視した掟に関して、何らかの和解的な方法をとらなければいけないことをペンテジレーアは直感したのかもしれない。

よく引用されるペンテジレーアが死の直前に明言する言葉

Ich sage vom Gesetz der Frau mich los,

Und folge diesem Jüngling hier. (V. 3012f.)

は、まさに死とひきかえに語られるというところに、この作品の中での意味があると考えられる。

4

„Ich will in ewge Finsternis mich bergen!“ とするペンテジレーアのところへアヒレスからの使者が近づいてくる。アマツォーネ国からの追放を宣せられたペンテジレーアは女としてアヒレスから愛されているということに、まだ辛うじて望みをつないでいた。これはアヒレスからの使者が近づいてくると聞いたとき „schwache Freude“ を表すことから察しられる。愛する人の消息が何か得られるのではないのかというかすかな期待が残っていた。そしてアヒレスからの挑戦の意を聞くとさっと顔が蒼ざめ、とても信じられないとばかり „Der Sohn des Peleus fordert mich ins Feld?“ をくり返す。

„Hier diese treue Brust, sie rührt ihn erst, / Wenn sie sein scharfer Speer zerschmetterte?“ これは他の二種の Variant によれば⁶⁾

[A] Pen. Es rührt ihn nicht, er dachte nichts dabei,

Es rührt' ihn nicht,

.....

Pen. Nun ists aus.

Pr. Wie?

Pen. *verstört* Gut, gut, gut.

[B] Pen. Es rührt' ihn nicht, er dachte nichts dabei,
Er liebt mich nicht,
.....

Pen. Nun ists aus.

Pr. Wie?

Pen. Gut, gut, gut.

となっている。第 15 場でのペンテジレーアの恋の告白もアヒレスの心を動かすことはできなかった。もう終わったという独白は私たちのテキストにはないがその代り *glühend* に „Nun denn, /So ward die Kraft mir jetzo, ihm zu stehen“ と、続く狂気に連なる感情の昂ぶりが示される。ペンテジレーアのアヒレスに対する怒りと絶望はこれまで自分の全存在をかけて愛し苦しんできたところの必然的な過程、前場で、すでに限界に達しているところの状況から考えられなければならない。自分自身の悲劇的状況が、アヒレスの挑戦という Anlass によって狂気にまでたかまり破壊衝動の爆発となる。すでに第 9 場で、かつてアヒレスを得ることを予想して自ら命じたばら祭の準備を見て、彼を *bekränzen* できぬ苦痛がペンテジレーアの胸にはげしく噴き出す場面があった。乙女たちが編んだばらの花輪をひきちぎりながら、彼女は、自分の感情と動かしがたい現実との隔たり、その出口のない苦しみに、一切のものが破滅し去ることを願う。„Dass der ganze Frühling/Verdorrt! Dass der Stern, auf dem wir atmen, /Geknickt, gleich dieser Rosen einer, läge! /Dass ich den ganzen Kranz der Welten so, /Wie dies Geflecht der Blumen, lösen könnte!/O Aphrodite!“ (V. 1226ff.) これと同種のそしてより決定的な心的状況が狂気のうちでのあの行動へ彼女を走らせた。

さて、アヒレスからの挑戦は実は、戦いを装って、ペンテジレーアの捕虜となりテミスツェーラへついて行こうという彼の策であった。ここにもクライストの他の作品に特徴的な *Versehens-Motiv* (まちがいのモチーフ) がみられる。ペンテジレーアとの出会いからもどったアヒレスは味方の陣営の中で、友人たちの作戦の相談をうわの空で聞き流し、心はただペンテジレーアだけに傾されている。そして彼女を花嫁にするまでは故郷に帰らないと言い放って戦いに出て行く。(第 4 場) 彼は戦いでペンテジレーアをうち倒すと蒼ざめ、自分のなした行為を声高く呪いながら彼女を抱きおこす。ペンテジレーアはアマツォーネ軍に奪い返されたので、アヒレスは武装をといてアマツォーネ軍を追ってくる。(第 8 場) アヒレスはプロトエに (ペンテジレーアではなく) „Sag ihr, dass ich sie liebe“ と言う。15 場でペンテジレーアが自分の喜びに夢中になり愛情にみちた優しさを彼に示すのに対し、アヒレスは言葉少く、ペンテジレーアとのこころの触れ合いよりもむしろアマツォーネ国の不思議な掟について知ることに関心が集中して

いるようである。アヒレスがペンテジレアーに対して質問以外に口にする言葉といえ、彼女の方が自分の捕虜なのだと告げるペンテジレアーにとってはこの上なくおそろしい言葉である。他のいくつかの場面に読みとれるように（とくに 24 場）、クライストは、ペンテジレアーの心を傷つけたり残酷な事実を彼女に知らせる役目を主として祭司長に言わせ、プロートエには言わせないようにしている。これは Variant と比較してみるとクライストの意図がよりはっきりしてくる。たとえば私たちのテキストでは 24 場で „Der Pfeil wars der ihn traf…” とアヒレス惨殺の様子をペンテジレアー自身に告げ、さらにいっそう痛ましい事実, “Gefangen/Wollt er sich dir ergeben, darum naht’ er!” を告げるのは祭司長であるが、Variant ではこれはいずれもプロートエに告げさせているのである。プロートエのようなペンテジレアーの真の理解者、友人には残酷な役目を負わせないようにクライストは心を配って書き換えたと推測できる。まさにアヒレスの口からペンテジレアーにとって致命的な言葉を言わせているのは、アヒレスのペンテジレアーに対する愛情の質が、ペンテジレアーのアヒレスに対するそれと、全くちがうものであることを表しているといわなければならない。

21 場でギリシア軍の陣営で友人たちと話を交しているアヒレスから、ペンテジレアーに対する彼の気持が明らかとなる。„Halb Furie, halb Grazie, sie liebt mich—/Und allen Weibern Hellas’ ich zum Trotz,/Beim Styx! beim ganzen Hades! ich sie auch.“ (V. 2457ff.) „Ja. Doch eine Grille, die ihr heilig,/Will, dass ich ihrem Schwert im Kampf erliege,“ (V. 2460f.) ペンテジレアーにとって心の大きな苦痛を要求した国の掟がアヒレスにとっては気まぐれとしか感じとられていない。ここにはそれぞれ自分の立場でものを判断する各人の絶対的な心のへだたりがある。ペンテジレアーが犬や象を連れてすさまじい勢いでやってくるとの報告に, „—O! Die sind zahm, wie sie.“ と言っている。アヒレスはペンテジレアーが自分を愛しているということに対してみじんも疑いをもっていない。彼女がアヒレスに手向うくらいならそれより先に自分の胸をかきむしるだろうというアヒレスの言葉は、彼女の愛を信頼して同質の愛でもって応えているというよりは彼女から愛されていることに信をおきすぎている。すでに 11 場でアマツォーネの兵たちに向って「解き放たれた猛犬たちが吠えながら私に近づいて来たらあなた達は自分の身体をもって犬どもと私との間に身を投げ出し、あなたたちを愛にもやすこの男の胸を護るだろうに」とアヒレスがいうと、一人のアマツォーネは „Der Uebermütge!“ と叫ぶが、そのようなところが 21 場のアヒレスからも感じられる。一方ペンテジレアーには自分がアヒレスから愛されているということははっきりした形で一度も意識にのぼってきたことがない。自分自身の彼に対する愛に没頭していたあまり、彼からどう思われているかを考えたことがない。挑戦の知らせを受けとったときはじめてそのことに気づくのである。双方の相手に対する向い方の質的相違、それぞれ自分なりの性格、おかれた立場から愛し行動する双方の絶対的くいちがい（アヒレスは彼なりに „es ist mein Ernst.“ である）がこの挑戦に関する Versehen（そう呼ぶ

とすれば)の原因とみることができる。とくにはじめの章でみたように、強い自己感情に耽溺し外界との断絶を経験するペンテジレーアは、自分の恋の相手とさえほんとうの意味での感情の交流をもつことができないのである。ペンテジレーアもアヒレスも自分の側からしか愛することができない人物であるといえる。クライストの他の作品における *Versehen* は、たとえば „Familie Schroffenstein“, „Kätzchen von Heilbronn“ また „Das Erdbeben in Chili“, „Der Findling“ などの中では、全くの偶然から起っており、そこには宿命論的な暗さ、偶然にもとづいた *Gebrechlichkeit* がみられる。また『ペンテジレーア』の挑戦の *Versehen* と一見類似している „Die Verlobung in St. Domingo“ では、トーニーの行為を誤解したグスタフに射たれて死ぬ彼女の最後の言葉は „du hättest mir nicht misstrauen sollen!“ であり、グスタフも髪をかきむしって „Gewiss! ich hätte dir nicht misstrauen sollen!“ という⁹⁾。ここでは互いに一旦感情がまじわりあった仲であり、愛と信頼は一旦相互的に告白され、相互的に感じとられている。アヒレスはペンテジレーアに対して決り文句で答えただけで直接的愛の表白を行っていない。アヒレスとペンテジレーアの間には真の心の触れあいはなかったといえる。愛する者同士の絶対的のくいちがいから起こった *Versehen* は自己の感情を唯一の基盤として生きる個我によって、いっそう必然的なものとなった。

最後に 24 場を中心に、ペンテジレーアの精神錯乱の中で行われたアヒレス惨殺という破局の意味と、ペンテジレーアの死について考えてみたい。

アヒレスの使者から挑戦の意向を受けとったペンテジレーアは、はじめ信じられない様子だったが、これで全てが終ったと感じた。その極度の絶望が彼女のこころを錯乱状態に陥らせた。惨殺から帰って来た彼女は、荒れすさんだまなざしをした „lebendige Leich“ であるが、プロトエの優しい介抱に人間らしい感情をとりもどす。大理石の鉢に汲んでこられた水で頭を洗い „Ach, wie wunderbar.“ „Zum Entzücken!“ „Bin ich in Elysium?“ „Ich bin vergnügt.“ と全く恍惚としている。その様子はまわりの者たちがそろって讃嘆の声をあげるほど美しく愛らしい。ペンテジレーアは前に „Der Mensch kann gross, ein Held, im Leiden sein, /Doch göttlich ist er, wenn er selig ist.“ (第14場)と言ったが、まさにここの彼女は *göttlich* である。彼女はただ単に自分自身の感情の命ずるままに行動したから、あるいはアヒレスにうち勝ったから幸福なのだろうか。前にみたように彼女がアマツォーネであることは、彼女にとって動かしがたい事実であり、アヒレスを得るには戦いで彼にうち勝たなければならなかった。しかしそれは不可能であることが実際にわかった。その現実には解決しようのない *Ausweglosigkeit* が、いま錯乱のうちに凄愴な行為となって *Ausweg* を見出したのである。まだ錯乱から覚めぬ無意識の状態にいる彼女は、自分の願望を(アマツォーネという)現実の枠の中でなしとげた(錯覚の中での)充足感で幸福である。のちに „Ich war nicht so verrückt, als es wohl schien“ (V. 2999) と言うのは残虐な行為の中にであれアヒレスを倒したことは無意識裡の自分のねがいの実現であったことを意味す

る。それが現実の枠内で彼の愛をえる唯一の手段だったからである。ペンテジレアが水で頭を洗ってうっとりしている場面は、彼女が今までそれと闘ってきた大きな苦痛から解放されているという点でも感動的であるが、そこにあるのは、アヒレスの死という痛ましい代償を払って得られた心の充足であり、その美しさはまさに脆い。個人のこころの真実が現実の客観世界内ではこのような悲惨な形でしか守りとおせなかったところに、このドラマの悲痛な悲劇性がある。いい方を換えれば、クライストが強く求めて達することのできなかった現実の中での自分の夢の実現の至福感を、彼はこの無意識のうちに頭を洗っている「白鳥のように」神々しいペンテジレアのすがたの中に、美しく描いてみせたといえるだろう。

次第に意識の回復してきたペンテジレアは自分の行った行為を認識すると、はつきりした意識をもってアマツォーネ国からの訣別を宣言し、自分の心のうちの „Vernichtendes Gefühl“ を掘りおこし、„Jammer“ と „Reue“ と „Hoffnung“ の助けをかりて意志の力で死ぬ。この „Hoffnung“ は他の Variant では „Liebe“ となっている。¹⁰⁾ アヒレスへの愛を全うするという意味での漠然とした Hoffnung であろう。当時一緒に住んでいたプフェールの談話によれば、クライストは『ペンテジレア』を書き終えたとき、プフェールの部屋へ全くとり乱し深いため息をしながら入って来て、一体どうしたのだという友人の問いに、絶望に充ちたかなしみの表情で「彼女が今死んだんだ！」とほんとうに苦しそうに叫んだという¹¹⁾。ことの真偽はともかくとして、ペンテジレアの死はたとえ彼女が „Hoffnung“ をもって死んだとしても、そこに「明るさ」や「勝利」があるといえるだろうか。プロートエがいうように、„Wohl ihr!/Denn hier war ihres fernen Bleibens nicht.“ (V. 3035f.) であって、このドラマは自分の感情に忠実に生きる人間の讃美である——„Des Lebens höchstes Gut“ (V. 1287), „Dir scheinen Eisenbanden unzerreissbar, /Nicht war? Nun sieh: sie bräche sie vielleicht, /Und das Gefühl doch nicht, das du verspottest.“ (V. 1282ff.)——と同時にそういう人間に免れがたい他者との断絶と背反の悲劇となっている。

クライストは彼自身の自殺(1811年 11 月 21 日)の直前に何通かの手紙の中で自分の死について書いている。„mitten in dem Triumphgesang, den meine Seele in diesem Augenblick des Todes anstimmt,“ (マリー・フォン・クライストあて, 1811年 11月19日) „dass meine Seele……zum Tode ganz reif geworden.“ (同) „halb wehmütig, halb ausgelassen“ (ゾフィー・ミュラーあて, 同年同月20日) „wir zwei trübsinnige, trübselige Menschen“ (同) „ich bin ganz selig“ (マリー・フォン・クライストあて, 同年同月21日) „halb an Freude und unaussprechlicher Heiterkeit“ (ウルリーケ・フォン・クライストあて, 同年同月21日) と¹²⁾。そこにはある種の落着いた明るさが支配しているが、これをもってただちにペンテジレアの死と結びつけるのは問題がある。ペンテジレアの „reif zum Tode“ (V. 1682, V. 2865), „selig, überselig“ (V. 2864) はいずれも Täuschungsszene, 現実の事実がおおいかくされて

いるいわば彼女の夢の場面で語られるからである。詩人クライストはペンテジレーアが恍惚状態で頭を洗っている場面でこのドラマを終らせなかったのである。クライスト自身の死の直前の明るい表情は、何らかの現実を意識の外でおおいにかくした、彼自身による Täuschung だったかもしれない。

使用テキスト

Heinrich von Kleist: Sämtliche Werke und Briefe, herausgegeben von Helmut Sembdner. 2. Aufl. Carl Hanser Verlag, München 1961

註

- 1) テキスト 2. Bd. S. 800
- 2) テキスト 2. Bd. S. 797
- 3) Werner Schmidt: „Penthesilea“ in der Kleistliteratur. S. 33
- 4) テキスト 2. Bd. S. 797
- 5) Curt Hohoff: Traum und Wirklichkeit bei Heinrich von Kleist (Merkur XV. Jhrg. Ht. 11) 参照。
- 6) Ingrid Kohrs: Das Wesen des Tragischen in Drama Heinrichs von Kleist. S. 56
- 7) テキスト 1. Bd. S. 932 (Anm. vom Herausgeber zu Penthesilea)
- 8) テキスト 1. Bd. S. 858, S. 879
Variant [A] は雑誌 „Phöbus“ Ht. 1 (Jan. 1808) に掲載された Fassung,
[B] はクライスト自身によって訂正されている書き写し (Abschrift)。
- 9) テキスト 2. Bd. S. 193
- 10) テキスト 1. Bd. S. 885 上記 Variant [B]
- 11) Heinrich von Kleists Lebensspuren. Dokumente und Berichte der Zeitgenossen, herausgegeben von Helmut Sembdner. Carl Schünemann Verlag, Bremen. S. 133.
- 12) テキスト 2. Bd. S. 884 ff.